

1. 鈴木正三の著作「七部の書」について

はじめに

鈴木正三は、三河国足助庄則定で天正7年(1579)に生まれた。正三は三河武士累世の血を受け、42歳まで徳川家に仕えて関ヶ原、大坂冬・夏の陣に出陣し、旗本となった。大坂城番士を勤めていた41歳のとき、「仏教は社会生活に役立たない」と論陣を張る儒者に反論として『盲安杖』を書いた。

42歳のとき落髪遁世し、曹洞宗の禅風を名のる僧となり、俗名を音読して正三(しょうさん)と呼ばれることになった。

徳川幕藩体制成立期において、正三は庶民と同じ目線で勤労の意味を考え、従事している職業に打ち込むことによって心の平安が得られると説いた。

天草・島原の乱後、実弟鈴木重成が天草初代代官となったので、64歳の正三は彼の地に赴き島民の救済と仏教の復興に尽力した。

慶安元年(1648)70歳のとき諸僧の招きに応じて江戸に出た。正三は、それまでにまとめあげた思想を人々に唱導した。この時期、恵中が正三の弟子になり約3年間隨身した。恵中は正三の言行を丹念に記録し、正三の語録として『驢鞍橋』上中下3冊を刊行した。

明暦元年(1655)正三77歳、江戸駿河台にて遷化。生涯で自著7部(後述)、弟子恵中の編撰になる語録『驢鞍橋』と拾遺『反故集』がある。

1-1 「七部の書」 概略 正三が意図したこと 利用目的

1-1-1 『^{もうあんじょう}盲安杖』 正三の最初の著作。正三の思想の概論であり、序論。

1-1-2 『^{ばんみんとくよう}万民徳用』 男性向け(士農工商)の日常生活の心得。

1-1-3 『^{ふもとのくさわけ}麓草分』 出家僧侶の初心の心得。

1-1-4 『^{ににんびく}二人比丘尼』 女性向けの仮名法語。

1-1-5 『^{ねんぶつぞうし}念仏草紙』 女性向けの仮名法語。

1-1-6 『^は破^き吉^り利^し支^た丹^ん』 寺院住職ならびに僧侶向けの排耶活動テキスト。

1-1-6 『^{いん}因果^が物語^{ものがたり}』 因果応報の実話を集め、修行に資するための資料集。

1-2 「七部の書」 成立 内容

1-2-1 『盲安杖』 一卷。

【成立】 元和5年(1619)己未。 41歳。

正三最初の著作。

儒者が仏法は世法に背くと言ったことに対する反論。

【内容】 10ヶ条の教訓とその解説からなる。

仏道に従った生き方、また、禅の立場から心のありようについても述べる。

【本文の一例】 パワーポイントで示す。

1-2-2 『萬民徳用』 一卷。 修行之念願、三寶徳用、四民日用の三部からなる。

【成立】 武士日用 寛永8年(1631)辛未。 53歳。

三寶徳用 慶安3年(1650)庚寅。 72歳。

修行之念願 慶安5年(1652)壬辰 74歳。

【内容】 徳用とは徳と用。そのものがもつ長所と働きのこと。

四民日用は、武士日用・農人日用・職人日用・商人日用の四部からなり、「職業即仏行」の考えをそれぞれの職業において明確にしている。

【本文の一例】 パワーポイントで示す。

1-2-3 『麓草分』 一巻。

【成立】 寛永13年(1636)丙子。 58歳。

丹波の瑞巖寺において万安英種の求めに応じて執筆。

【内容】 17ヶ条の教訓とその解説からなる。

剃髪から一寺の住職となるまで、出家者の心得を述べる。

【本文の一例】 パワーポイントで示す。

1-2-4 『二人比丘尼』 二巻二冊。

【成立】 執筆時期は特定できない。

【内容】 仮名草紙。 戦死した夫を弔う妻の遍歴。 剃髪し比丘尼となった妻が諸国を廻り、出会った老比丘尼から仏道の核心を教えられる物語。

【本文の一例】 パワーポイントで示す。

1-2-5 『念仏草紙』 二巻一冊。

【成立】 執筆時期は特定できない。

【内容】 仮名草紙。 両親を亡くした娘が比丘尼となって遁世行脚の旅に出た。
同郷の僧と会い、比丘尼と僧の間で仏法に関する問答を交わす。

【本文の一例】 パワーポイントで示す。

1-2-6 『破吉利支丹』 一卷。

【成立】 寛永19年(1642)壬午。 64歳。

実弟重成が天草代官に赴任したとき、助言者として天草に赴いた際に執筆。

【内容】 問答形式。 9項目に亘って、キリスト教の教義を批判、論破する。
排耶活動の理論を「説く」ためのテキスト。

【本文の一例】 パワーポイントで示す。

1-2-7 『因果物語』 三巻三冊。

【成立】 寛永初期から唱導の資料とすべき霊異譚を収集、筆記する。

【内容】 霊異譚。

【本文の一例】 パワーポイントで示す。